

第四章 動物 植



図1-20 自然林(下小口地内)

概況

大口町は、木曾川によってできた犬山扇状地の東部に位置している。海拔最高四〇メートル、最低一五メートル、標高差二五メートル程度の平坦な土地である。

扇状地は砂地であり、その下部には礫層があつて、水通しがよく、保水力に欠けていて、その多くは、かつては原野であつたと考えられる。武蔵野を思わせる原生林の林野は、最近まで尾北地方のそこかしこに点在していて、狐や狸、妖怪にまつわる話も語りつがれているように、いろいろな獣や鳥類も数多く生息していた。

しかし、近年この地域は、名古屋市のベッドタウンとして、大規模な住宅開発が行われたり、企業誘致による工場の進出などにより、林野は急速に減少し、生活汚水や工場排水などによる河川の汚染とともに、自然環境の破壊は、野鳥や獣などの棲息地をうばい、それらを絶滅の危機に追いこんでいる。

春には、小川の堤や田圃のあぜなどで、セリやヨモギを摘み、田圃で

はタニシをとり、夏には小川で泳ぎ、魚釣りに明け暮れ、ホタルを追い、カブトムシやクワガタなどをさがして雑木林をかけまわったむかしの思い出は、いまはこども達にとつては、かなえられない夢となりつつある。

第一節 動物

公害による環境汚染や開発による雑木林や原野の減少などによつて、野鳥や獣の数は近年とくに少なくなつた。個体数のいちじるしい減少により絶滅の危機にひんしているものも多い。

本町内で見られる動物は、およそつぎのようである。

獣類 ウシ、ウマ、ウサギ、イヌ、ネコ、ネズミ、イ

タチ、モグラ

鳥類 ニワトリ、ハト、スズメ、モズ、ツバメ、ムク

ドリ、セキレイ、サギ、トビ、ヒバリ、メジロ、

カラス、キジ、ヒヨドリ

魚類 コイ、フナ、メダカ、シロハエ、カワムツ、モ

ロコ、ナマズ、ウナギ、ドジョウ

昆虫類 アゲハチョウ、モンシロチョウ、アカトンボ、

シオカラトンボ、アシナガバチ、クマバチ、ミ

トノサマガエル、ヒキガエル、アマガエル、
 マムシ、アズキヘビ、トカゲ、カメ



図1-22 コサギ

両棲類 爬虫類、ツチガエル、
 アオダイショウ、シマヘビ、

貝類

タニシ、シジミ、カ
 グモ
 ワニナ、カタツムリ
 タイコウチ、ミズカマキリ、ヤゴ、アブラゼミ、クマゼミ、ニ
 イニゼミ、ツクツ
 クボウシ、スズムシ、
 マツムシ、キリギリ
 ス、バツタ、コオロ
 ギ、ウマオイ、オニ

ツバチ、ハナアブ、コガネムシ、テントウムシ、カマキリ、カ
 ミキリ、ミノムシ、シヤクトリムシ、マツケムシ、クスサン、
 イラムシ、キンケムシ、ミズスマシ、アメンボ、ゲンゴロウ、
 タイコウチ、ミズカマキリ、ヤゴ、アブラゼミ、クマゼミ、ニ

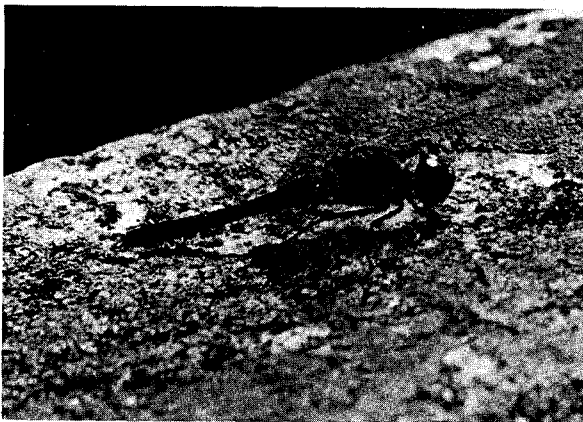


図1-23 トンボ



図1-24 ナガコガネグモ

主な動物の生息の様子

《哺乳類》

ネズミ…家ネズミ(ドブネズミ・ハツカネズミ)野ネズミなど昔と変わりなく各地に生息している。ネズミの駆除は毎年行われているが多
く繁殖している。

イタチ…各地に生息し、とくに田のあぜ、川岸、人家の近くでみることが多く、田んぼ道を横断して走り去る姿はこっけいである。

モグラ…最近やや少なくなつたといわれるが、畑の作物を根もとから持ち上げたり、田のあぜに穴をあけ被害をあたえる。「昔、モグラを捕獲し役場へ持っていくとお金がもらえた」と、年よりの人が話してくれた。

《鳥類》

ウグイス…益鳥、毎年二月ごろになると屋敷附近にきて美声でなくのを聞く。
ツバメ…二月下旬になると各地で見られ、一〇月になると皆渡り去ってしまう。人々の目を楽しませてくれる鳥である。農家の庭の天井に巣造りの様子が見かけられる。

ヒバリ…昔は麦畑で巣がよく見られた。二月に入つて暖かい日には、空高くまいあがり、美声で鳴く。
サギ…シラサギ、ゴイサギなど川辺、稲田で餌をあさっている姿を見るが、昔のように大きな群は見かけられ

ない。

キ ジ…狩猟禁止地区となり最近、田畑でよく見かける。

ハ ト…家庭で飼っていたハトが放たれ野性化したものが多く繁殖している。最近、キジバトも屋敷近くでも見かけることがある。

《は虫類》

ヘビ、トカゲ、カエルなど耕地整理、土地改良などの工事で用排水などが整備されたり、農薬などの影響でかなり減少した。

《魚貝類》

フナ、ナマズ、ドジョウ、シロハエなど小魚が田、川、池などに多くいたが、農薬散布、生活污水、工場排水などの影響で一時は非常に少なくなったが、河川浄化、農薬の使用制限によって在来の魚が町内で増加している。五条川ではいたるところで釣りを楽しむ人の姿が最近とくに多くなってきた。

貝類では、シジミ、タニシ(ツボ)など代表的なものであって、小川や田に多くいたが、魚類と同様で、小川や溝などが整備されるにつれ減少した。

《昆虫類》

ホタル…各地の川で夏の夜を飾っていたホタル、ホタル狩りの子供の姿は見られなくなってしまった。

イナゴ…無数に繁殖し、稲に大きな被害を与えていたが今日では農薬で非常に少なくなった。昔はこれ捕えてニワトリの餌にしたり、佃煮にして食べた。

セ ミ…アブラゼミ、ミンミンゼミなど昔とあまり変わりなく、町内いたるところで鳴いている。

カブトムシ、クワガタムシ…神社、寺などのカシの木、クヌギの木には立派な角をもったカブトやクワガタムシが多かったが、現在は非常に少なくなった。

トンボ…秋の夕暮れトンボが群れとぶ風景は、ほとんど見られなくなったが、アカトンボ、シオカラトンボ、オニヤンマ、アキアカネなど目にする事ができる。

子供がトンボやチョウを追う姿はほとんど見ることができなくなった。

チョウ…トンボと同じように数が非常に少なくなったが、アゲハチョウ、モンシロチョウなどは現在もかなり町内にいる。

第二節 植 物

大口町は、海拔最高四〇メートル、最低一五メートル、標高差二五メートル内外の平坦な土地で、点在する雑木林以外は、よく開かれた耕地で、その植物生態は、尾北地方の他の地域とかわるところがない。

本町内で見られる植物は、およそつぎのようである。

雑木林の樹木

往時の木曾川の支流の川筋ぞいに点在する雑木林には、カシ、マツ、スギ、ヒノキ、ナラ、ハゼ、ウルシ、ハギ、ヤナギなどが自生している。

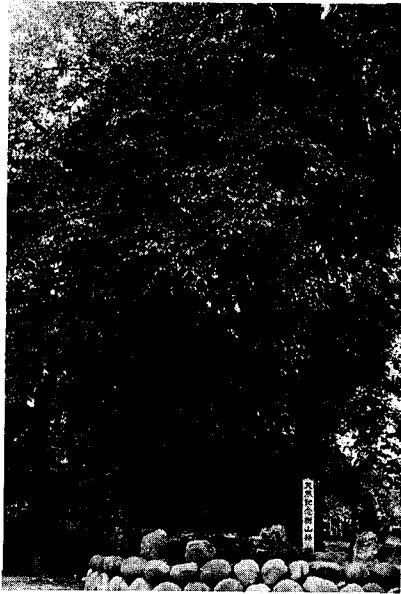


図1-25 天然記念樹「山柿」

神社・寺の境内の樹木

カシ、スギ、ヒノキ、クス、ナラ、ツバキ、サカキ、ヒサカキ、ワクラ、マサキ、イチヨウなどが見られる。五条川流域に見られる植物

五条川の流域には、往時の洪水などによって、木曾川の上流などより流されてきた植物が自生している。

センニンソウ、イケマンソウ、イワタバコ、イワウチワ、ヒメハギ、オガルカヤ、チャンバギク(有毒)、コケモモ、シハイスミレ、タチツボスミレ、メガルカヤ

町の天然記念物

○ マメナシ(イヌナシ)

(長桜天神社境内)

○ 山柿

(中小口小口神社境内)

○ 山茶花

(下小口、酒井史郎宅)

薬用植物

オオバコ、キキョウ、オトコヨモギ、センニンソウ、タウコギ、ヒトツバ、ゲンノシヨウコ、ドクダミ、クコ、クチナシ、オトギリソウ、カラスウ



図1-26 天然記念樹「山茶花」

ラスノエンドウ、スズメノエンドウなどが生えている。近年その旺盛な繁殖力で、いたるところに繁茂し、人をなやませているものにセイダカアワダチソウがある。

水辺の植物

アヤメ、ショウブ、ウキクサ、サンショウモ、ホテイアオイ、コウホネ、マコモ、ヨシ

石垣や木陰の植物

イノモトソウ、イタチシダ、クサソテツ、ユキノシタ、イキシノブ

農作物

コメ、ムギ、ダイズ、アズキ、インゲンマメ、サツマイモ、ジャガイモ、サトイモ、ナガイモ、ニンジン、ゴ

雑草類

リ、スベリヒユ、イカリソウ、ネナシカズラ、ギシギシ、タンポポ

畑地には、ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、ヒメジヨオン、メヒシバ(ヤツマタ)、スベリヒユ、イヌビエ、オイシバなどが生えている。野原や川の土手、道端などには、タンポポ、スミレ、オオバコ、イノコヅチ、カヤツリグサ、ヨメナ、ツユクサ、ヒガンバナ、ヒデリコ、カラスビシヤク、カ



図1-27 セイダカアワダチ草(帰化植物)

ボウ、ダイコン、カブ、ホウレンソウ、トマト、キュウリ、エンドウ、ナス、スイカ、ネギ、カボチャ、キャベツ、イチゴ、ブドウ、クワ、その他に、マツ、スギ、ヒノキなど山林用苗の育成をはじめ、各種の庭木も栽培されている。

○竹

マダケ、モウソウの竹やぶが屋敷の周辺に多くあり、冬季の北風を防ぐと同時に、稲架や農作物の支柱あるいは建築用材料として重宝がられていたが、最近では数か所みられるほどに減少した。これは昭和三四年九月の伊勢湾台風の未曾有の被害に加えて、生環境の整備が近年積極的に行われたことによるものである。こうした中でモウソウ竹は、食用のたけのこ（ほとんどが自家用）として小面積ではあるが、竹やぶをもっている家がある。

〈樹木にまつわる話〉

○七本杉

萩島の郷西、木津用水河岸に七本に分れた老杉があった、ここには天神様（七尾の天神）も祀られ、名高い大木であったが落雷などによって傷がつき、近年ついに枯死し根元で伐採された。



図1-28 野 菊

○荒井の榎

木津用水の五条川取水杖北あたりに、太いエノキが生えていた。これは昔、一里塚のしるしとして犬山を基点として、一里・二里と下の方へ植えられたものと伝えられていたが、昭和初期の河岸改修の折に伐採された。

○桜塚の桜木

大屋敷長松寺の西南にある桜塚には、昭和一〇年ごろまで桜の老木があり、樹勢が旺盛な時代は遠くから花見に来る人があつたとも伝えられている。

またこの塚の桜木については、往古、奈良から藤原の某人がついてきた杖をこの地につき立てておいたら、この杖から芽が出て、一重・八重の桜の花が咲いたことから塚の名も、その後、桜塚とよんだという伝え話がある。

○梶原の松

松山と外坪本郷のなかほど、南野の地に老松が生えていた。これを梶原の松として崇め、のちこれを切り、その跡へ梶原宗安の塔を建てたと伝えられる。現在、梶原宗安の塔が外坪巾上地内の墓地にあるが、同じものかは不明である。